学校データ
【学級数】
６学級
【児童生徒数】
３３人
【地域コーディネーターの有無】
有・無

『キラリ☆田井学』～田井の地域素材を活かし，ふるさと田井を活力のある地域へ～

１　はじめに

当校の学区，田井地域は全国的な傾向にある「少子高齢化」の地域である。この地域の課題を学校の立場で受け，子どもならではの発想力と行動力で田井の地域を活力あるものにしたい。それは学校ばかりではなく地域や保護者の願いでもあり，北谷南部みつばコミュニティの願いでもある。地域・保護者・学校の三者の根底には「ふるさと田井」への熱い思いがある。

２　取組の実際

(1)「田井学」を実践する地域興し

「田井学」とは，田井小学校の教育活動の柱となる部分である。各教科・領域等を横断的に展開する学びで，低学年の「稚児舞」，中学年の「トッテツ（栃尾鉄道)」，高学年の「耳取遺跡」等が地域教材と関連させてある。

「田井学」のポイントを次のように捉え，子どもの成長を育んだ。

○「ふるさと田井を愛する子ども」を育む６カ年の学び

○ふるさと田井の「もの・人・こと」と関わりながら躍動する６カ年の学び

○教科・領域との関連性を重視した６カ年の学び

中核となった４つの活動を次に示す。

①地域伝統の舞から学ぶ

低学年は地域に出掛け，その中で地域伝統の舞である「稚児舞」に出会う。その舞を地域の方から教えていただく。地域の舞を地域のみなさんから学ぶことで「ふるさとを愛する心」「地域の伝統を伝えていこうとする心」が子どもたちに育っている。

②地域の過去から学ぶ

現校舎の横を走っていたトッテツは，地域の方の移動手段として愛されていたが，昭和５０年に廃線となった。中学年は，トッテツの走っていた当時の出来事や駅の場所について学ぶ。また，学びの過程で，トッテツで勤務していた地域の方から話を聞く。地域の生活の足であったトッテツについて学びを進め，地域の過去を地域の人と学ぶ，振り返ることは地域の人との地域活性化の一歩にもなった。

③未来の田井を子どもと地域で考える

「賑わう田井にしたい」そう願った子どもたちは，「今の田井」「未来の田井」について調査活動を展開する。地域に出掛け，直接地域住民に「今の田井をどう思っているのか」「将来，田井の町（地域）はどのような町にな

ってほしいか」を問い掛け，地域住民の声を集約した。聞き取ったことを基に子どもたちは，「未来の田井」をイメージした。クラスで話し合った結果，田井を観光地にし，田井を賑わしたいと願った。

④プログラミング教育から未来の田井を考える

昨年度，当校は長岡技術科学大学との連携で「SDGs 教育」を推進した。「住み続けられるまちづくり」をベースにしたプログラミング教育である。プログラミング教育の目的は，「身近な生活でコンピュータが活用されていることや問題の解決には必要な手順があることに気付くこと」と「コンピュータの働きを，よりよい人生や社会，田井の地域に活かそうとする態度を育むこと」の２つである。「情報化の進展と生活や社会の変化」や「まちの魅力と情報技術」を探究課題として学習した。

３　成果と課題
及び本実践で育成された資質・能力

（１）成果

○　子どもたちが地域の方と関わりながら地域のことを知る，触れることは，「ふるさと田井を愛する」ことにつながり，今の田井を見つめ，これからの田井を考えるきっかけとなっている。

＜学校評価＞

・ふるさと田井が好き…90％（児童）
・田井学の学習が好き…95％（児童）
・学校は地域と連携した教育の推進を行っている…90％（保護者）

○　「田井学」を学習の柱とする地域活性化の取組により，地域（人・もの・こと）が子どもに近くなり，地域の方からの指導機会が増えたことで，地域と学校が近い関係になり，学校を賑わすことにつながった。

○　子ども自身が自分たちの活動が「地域の活性化につながっている」「地域のみなさんに自分たちの活動が認められている」といった活性化に前向きな心を育むことができた。

（２）これから（課題）

○　児童数の減少，少子高齢化の傾向にある地域である。子どもたちがスタートさせた地域活性化を地域・保護者・学校，さらに関係機関も含めて，総掛かりで熟議を行い，協議のスタンスを固めることが大切である。

４　おわりに

教育活動において，コミュニティスクールの理念「熟議」と「協働」をベースに展開するからこそ，地域・保護者と学校の距離が近く，子どもたちにとってのエネルギーになっている。まさに「地域は学校の応援団」「学校は地域の活力源」としての関係を構築し続けている。